



班まとめレポート

12/13 日担当グループ

班長 TA050951 松原 優

副班長 TA050911 兵頭 孝二郎

私たちは、この建築実務演習の講義で 12 月 13 日を担当し、その講義の講師として江藤真理子さんを招いた。江藤さんは現在自分の設計事務所「空設計工房」で木造建築を専門に扱っていらっしゃる方である。

江藤さんが 2,3 箇所の設計事務所で働き、その後育児から再び建築の世界へとへとカムバックしたのは、ちょうどバブル経済がはじけた頃であり、そのころの建築は造っては売る、安く造って高く売るなどという見栄えの良いものを造っていく感じだったという。その中で江藤さんは「悪いことをしていたみたい。」だったという。というのも、子供を育てていると、環境のことを考えてしまい、見栄えが良いからといって、多くの化学繊維が入ったものを使う、あるいは石油繊維が多く入ったものを使うことは、すぐに壊される運命にある。そんなことはせず、使う人のことを考えて、使う人が気持ちよく使っていける建物を造るため、最初は独立する気はなかったのだが、自分でやりたいことは自分の力でやっていくしかないと思い、現在の「空設計工房」を立ち上げたという。木造の戸建てを中心にやっているという。

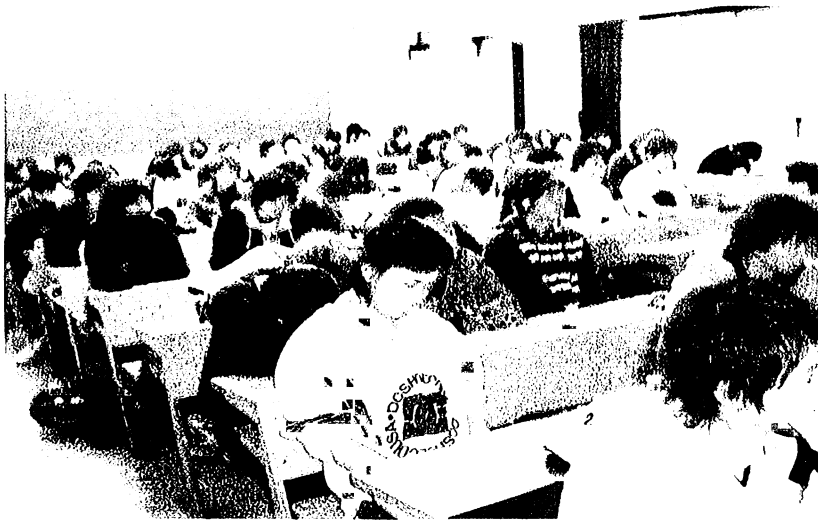
この事務所で 1 番に考えていることはやはり環境のことである。地球を取り巻く環境、また部屋内の環境、全ての環境において負担の少ないものでやっていくというのが江藤さんのやり方である。これはこれまで数多くのものを手がけてきて証明されたそう。そして作るうえでは、建築基準法でも記載されている通り、その人の安全を念頭においてやっている。ただ硬くすればよい、ただ強くすればよいのではなく、バランスを考えて造っているのだ。温熱環境や空気や建物、色、光など人が要求するものを重要視しにも見えないところに主眼をおき、気をつかって行っているという。



「家」というものではなく、「住まい」を江藤さんは作っていこうと考えている。そして家族には 1 人の人もいれば、2 人の人もいる。もしくは 5,6 人の家族だっている。そこはケースバイケースで作っている。後に、子供が大きくなればいなくなる部屋も出てくることもある。そこを放置するのではなく、家族と共に住まい自体も一緒に成長し

ていけるような家を考えている。

江藤さんは、クライアントとの打ち合わせの中で、新しい住まいに持ち込む荷物の量から生活に関してどのぐらいエネルギーを消費して、どのくらい快適な生活を送るかというのから話を進めるのだという。そこで江藤さんは快適さを得るために電気など多くのエネルギーを使って実現するのは簡単であるが、中で人間が動いて求める快適さを実現するため、最小限のエネルギーで済ませる方法をクライアントには勧めるそうだ。家を支える柱、梁も今では安い外国産などがあるが、それを運ぶためにかかる船のオイル、外国で使われた機械などのことがある。環境のことを考えてどうしたら1番良いかを考えた上で入手先を決めるのだという。やはり念頭は地球環境にある。



そのすべてを踏まえたうえで江藤さんは「帰りたくなる家」を造りたいのだという。江藤さんのおっしゃる「帰りたくなる家」で1つだけはっきりしているのは、熱環境・環境工学のことであるという。高气密・高断熱などでしっかりしていれば、環境への負担も少なく、快適が得られるのだ。今現在、地球環境は年々狂い始めており、これからは地球環境を考えた建築が大事だと言う。

そしてこの後、江藤さんがこれまで携わってきた木造の建物の説明が始まった。大半の建物は高气密・高断熱で床は地熱を利用したものなどがあつた。この話のなかで、自然から取り入れたものはカビに弱いという話が出てきた。しかしそれらのものは環境（気密・断熱）をやっているとカビは湧かず、ダニも出ず強くなるのだそうだ。結露を防ぐ方法なども知ることができた。それは、ペアガラスの入った木製の気密冊子を使うことだという。あまりなじみはないが、アルミの冊子に比べて全く違い、さわり心地も全く違うそうだ。またフローリングにもこだわりがあるらしい。江藤さんのフローリングのこだわりはムクを使用することだそうだ。そしてそこにも、環境への配慮があり、高級な完全に製品として使えるものではなく、商品として使えない撥ねられたものを使うのだという。そういうものは、長さも1つ1つ違い、均等な模様にはならないのだが、張っていくうちに色々な表情になり、面白いのだそうだ。

江藤さんの話を聞き、みなの木造建築への興味と関心を深められたのではないだろうか。木造の奥深さ、面白さもわかり、それと同時に環境への配慮、現在自分たちが学んでいる環境工学、温熱環境の重要性がわかったと思う。また、江藤さんの建築に対して行っていることは、私たちの目指す形なのではないだろうか。

今日、地球環境は年々狂っている。狂っていく原因は建築も多く関係しているだろう。今私たちができることは、少しでも環境へやさしいものを考え、将来へとつなげていくことではないだろうか。